

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720156
 研究課題名（和文）学習者の日本語力・学習動機・個性・英語力が英語学習活動に及ぼす影響

研究課題名（英文） The Effects of Learners' Motivation, Personality, and L1 and L2 Proficiencies on their English Learning Activity

研究代表者
 長 加奈子（CHO KANAKO）
 北九州市立大学・基盤教育センター・准教授
 研究者番号：70369833

研究成果の概要：

本研究では、学習者の学習動機、性格、日本語力、英語力が学習者の英語学習活動にどのような影響を与えているのかについて研究を行った結果、学習者の日本語力が英語力に、さらに学習者の性格要因が学習動機に影響を与えていることが明らかとなった。また、入学後の英語学習動機づけを調査したところ、学生の専門分野に関わらず統計的に有意な差は見られなかった。これらの結果を基に、長期的なインタビュー調査を行ったところ、日本の大学で英語を学ぶ学習者は高校から大学へのスムーズな移行ができておらず、その結果、大学入学後の英語学習がスムーズに行われていないということがわかった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,400,000	0	1,400,000
2007 年度	1,500,000	0	1,500,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	180,000	3,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：学習動機，英語教育，第二言語習得，学習者要因

1. 研究開始当初の背景

これまでの日本人英語学習者を対象とした研究では、英語力と学習動機との関係に焦点を当てたものは少なくないが、学習者の母語である日本語力と英語力に焦点を当てたもの、学習者の性格と学習動機、英語力との関係に焦点を当てたものはほとんどなかった。さらに、日本語力、英語力、学習動機、性格の4つの関係を総合的に研究したもの、またそれらの要因が学習者の学習行動にどのよ

うな影響を及ぼしているのか、長期的に分析したものはなかった。これまで英語学習に対する動機づけ研究は数多く行われてきたが、調査紙を用いた定量的な研究が主であり、学習動機を動的なものとして捉え、その変遷を分析する定性的な研究は皆無であった。そこで本研究課題では、学習者の英語学習動機づけを動的なものとして捉え、学習者要因との関係について研究を行う。

2. 研究の目的

本研究課題は、日本の大学で英語を学ぶ学習者に焦点を当て、英語学習に成功するか否かに影響を与える複数の学習者要因について総合的に探求する。学習者が行う英語学習活動を、様々な学習者要因から複合的に影響を受ける有機的なシステムと捉え、日本人英語学習者の英語学習活動に影響を与えている要因やその関係を分析する。学習者要因と呼ばれるものの中でも、本研究では特に、学習者の学習動機、日本語力、性格、英語力の関係に焦点を当て、4つの要因がどのように絡み合い、学習者の英語学習活動に影響を与えているのか、その構造について明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、定量的分析と定性的分析の両方の観点から学習者要因に対してアプローチを行った。まず、学習者要因については定量的に測定した。学習者要因を測定する尺度として既存の尺度を検討し、学習者の日本語力および性格については既存の尺度を利用し、学習者の学習動機および英語力については独自の尺度を構築した。学習動機については、学習者が教育を受けた文化における文化的価値観が大きな影響を及ぼすことがわかっているため、日本で初等・中等教育を受けた学習者を対象とした学習動機づけ尺度である市川(1995, 2001)を出発点とし、日本人大学生用の英語学習動機尺度を構築した。英語力を測定する尺度については、独自にクローズテストを開発し、尺度自体の信頼性、および既存の尺度である TOEIC®との相関を分析することで、測定の精度を上げた。これら4つの尺度をもとに、英語学習者の学習者要因について数値化を行い、その数値を基にクラスター分析を使って学習者を4つのクラスターに分類を行った。そのクラスターの中から2名ずつを抽出し、8ヶ月間にわたるインタビュー調査を行った。さらに大学卒業後の英語のニーズが高いとされる工学系の学生4名についても、インタビュー調査を行った。インタビュー調査の内容はすべて録音した後、テキストとして起こした。テキストデータに対してテキストマイニングの手法で分析し、学習者要因が学習者の英語学習活動に与える影響について分析を行った。

4. 研究成果

本研究では、焦点を当てた4つの学習者要因については定量的に測定すべく、既存の尺度を検討した結果、学習者の日本語力および性格については既存の尺度を利用し、学習者の学習動機および英語力については独自の尺度を構築した。本研究で使用した尺度は以下の4つの尺度である。

- (1) 学習動機づけ
市川(1995, 2001)を出発点として、独自に開発した尺度
- (2) 英語力
独自に開発したクローズテスト
- (3) 性格
主要5因子性格検査(村上・村上, 2001, 2004)
- (4) 日本語力
旺文社が開発した日本語プレースメントテスト(小野, 2005)

本研究で開発した尺度の詳細は次の2つである。

- (1) 学習動機づけ尺度
日本で初等・中等教育を受けた学習者を対象とした学習動機づけ尺度である市川(1995, 2001)を用いて、日本の大学で英語を学ぶ学習者の英語学習動機づけ尺度を構築した。日本の大学で英語を学んでいる大学生 1009 名に対して調査紙を用いた調査を行った結果、日本人大学生の英語学習動機の構造として、「充実・訓練志向」、「関係・自尊志向」、「実用・報酬志向」の3つの因子が抽出された。本研究課題において構築された尺度を用い、大学において異なる専門分野を専攻する学生達を対象に、英語学習動機の調査を行った。被験者の属性は工学系 86 名、医学系 91 名、英語系 30 名、経済系 72 名である。その結果、充実・訓練志向、関係・自尊志向、実用・報酬志向のいずれの因子においても、学生の専門分野の違いによる統計的に有意な差は存在しなかった。
- (2) 英語力測定の為のクローズテスト
英語の長文において、機械的に7単語目を空欄とし、その空欄に意味的・文法的に適切な単語を記入するクローズテストを作成した。全31項目中25項目が JACET 8000 の Level 1 の語彙となる、語彙難易度としては比較的易しいものとなった。採点手法については、正語法と適語法で、それぞれ一長一短あるが、信頼度を検証した結果、正語法 $Cronbach\ \alpha = 0.78$ 、適語法 $Cronbach\ \alpha = 0.85$ となり、本研究では適語法を採用した。また TOEIC®とも高い相関を示した ($r = 0.82$)。

以上の尺度をもとに、日本の大学で英語を学習している大学生 82 名に対して4つの学習者要因の相関関係を検証したところ、学習者の英語力と統計的に有意な相関($p < 0.05$)を示したのは、学習者の日本語力 ($r = 0.40$) と学習動機づけ尺度の関係・自尊志向因子 ($r = -0.25$) であった。学習者の性格は、学習動機と有意な相関を示しており、充実・訓練因子と外向性 ($r = 0.33$) および勤勉性 ($r = 0.28$)

が、実用・報酬志向と外向性 ($r=0.25$) が有意な相関を示した。

さらに、これら学習者要因の英語学習活動に対する影響を検証すべく、2つのインタビュー調査を行った。1つは、日本の大学で英語を学ぶ文系を専門とする学部生を対象としたものであり、もう1つは卒業後の英語に対するニーズが高い工学系の大学院生を対象とするものである。第1のインタビュー調査には、私立大学で経済系と英語系を専門とする82名(男性32名、女性50名)の学生がインタビュー調査対象者の候補となった。本研究課題において研究対象とした4つの学習者要因の測定値を基にクラスター分析を行い、4つのクラスターからそれぞれ中心的な学生を2名ずつ抽出し、8ヶ月間にわたり、英語学習の実態と英語観に関するインタビュー調査を行った。

インタビュー調査の結果、日本の大学で英語を学ぶ学習者の英語学習に影響を及ぼしていると考えられる以下の5つの要因があった。

(1) 計画立案力

英語学習実態についてインタビューしている中で浮き上がってきたのが、学習者の計画立案力が学習行動へ与える影響であった。特に生徒(学生)と教員との関係が高校までと大学では変化することにうまく対応できず、自分で自分の学習計画が立てられない者が目立ち、そのような学習者は継続的な英語学習活動ができていなかった。一方、高校時代から自分で学習計画を立て、実行していた学習者は大学入学後も、継続的な英語学習が比較的うまくいっているようであった。

(2) 学習者を取り巻く人々

週に複数回、英語教員と接していた高校時代から大きく変化し、大学では週1回程度しか英語教員と接することはない。その結果、英語の教員に距離感を感じ、授業や英語学習において疑問に思うことがあっても、なかなか教員に聞くことができないという状況が存在することが明らかとなった。その一方、学習者と同世代で学習者自身よりも英語ができる人物が、自分の英語学習過程や英語(学習)観を伝えることで、学習者に良い影響を与えている状況が見られ、そのような環境にいる学習者は、そうではない学習者と比較して英語学習に積極的に取り組むことができていた。

(3) 英語に対するニーズとウォンツ

大学において英語を専門とすかどうかどう

かに関わらず、今回の調査対象者となった学生達には共通して、大学入試における英語の試験というハードルが存在した。その為、高校時代までは英語学習のニーズは存在し、その結果、英語の好き・嫌いに関わらず英語の学習を行っていた。しかし大学に入学したとたん、それまでのニーズが満たされ、「何のために英語を学習するのか」という問いに対する答えが学習者自身の中で欠如してしまっていた。大学において英語を専門としない学生達は、もっと自分の英語力を向上させたいという英語に対するウォンツがない上に、何か他の目的の為に英語が必要であるというニーズまで欠如し、その結果、学習行動に結びつかないという状況に陥っていた。一方、英語を専門とする学生は英語学習に対するウォンツは強く見られたが、具体的なニーズが存在しないため、学習行動が円滑に進んでいないことがわかった。

(4) 学生の自信の欠如

学生の自信の欠如が、特に英語を専門としている学生に顕著に現れており、これが英語学習の負のサイクルを生み出していることが明らかとなった。特に英語系を専門とする学生は、高校までは英語で優秀な成績を修めていた学生が多い。その一方、大学に入学後、クラスメートの英語力の高さに圧倒され、その結果、予習をしているにも関わらず授業において発言することができないという、授業に対して消極的な学生を生み出していた。授業において消極的で発言しない学生に対して、時として教員は「予習不足」や「大学生としての自覚のなさ」というレッテルを貼ることがある。しかし今回の調査から、発言したいができない学生が少なからず存在することがわかった。そしてその背後には、学習者の自信の欠如が存在していた。この悪循環により、英語学習への意欲をなくし、その結果、英語学習に対して積極的に取り組むことができないという結果を生み出していた。大学入学後の英語学習を円滑にするためにも、自信をなくしかけている学生に対するケアが必要であるだろう。

(5) 大学の授業に対する不満足感

高校までの英語学習と大学での英語学習のギャップにより、大学の授業に対して不満足観を示すコメントが出てきた。大学入試などの筆記試験は、一部

の(自由)記述試験を除いて学習者の知識量を測定している側面が大きい。そのため、学習者の関心は「知っている」か「知らない」かである。一方、被験者達から不満足観が示された大学の英語の授業というのは、英語の知識ではなく、むしろ英語の運用力を問題とする授業であった。学生は授業で求められるものの変化についていけず、その結果、「大学の英語の授業は易しすぎる」と判断し、授業に対する不満足観として現れていた。

2つ目のインタビュー調査は、大学卒業後の英語のニーズが高い工学系の学生に対して行った。本インタビュー調査においても、1つ目のインタビュー調査で出現した5つのキーワードのうち、(4)を除く4つのキーワードが同じよう出現した。これらのキーワードは、文系・理系に関わらず、英語学習活動に影響を与えている要因と考えられる。

以上の結果を Dörnyei (2001)の Process-Oriented Model に従って解釈を行った。日本の大学で英語を学ぶ学習者は、大学入試という、高校までの英語学習の目的を達成し、英語学習動機づけのサイクルがいったん完結している状態にあると考えられる。そして新たなサイクルに入る段階、つまり Choice Motivation の段階に入るところであると言える。この Choice Motivation の段階で必要とされる適切で具体的な目標設定を行うことができれば、新たな英語学習のサイクルはうまく動き始めるが、現実には、その適切で具体的な目標設定というものができておらず、Choice Motivation の次の段階である Executive Motivation の段階に移行できていない。その結果、大学入学後の英語学習がうまく行かないという結果を引き起こしていると考えられる。しかし単に目標が設定されたからといって、Choice Motivation から Executive Motivation の段階に移行するわけではない。具体的かつ明確な目標設定がなされ、その後、その実現の為に必要な学習活動の提案がなされて初めて学習活動が開始されることが長期間におよぶインタビュー調査から明らかとなった。

本研究課題により、日本で英語を学ぶ大学生の英語力と統計的に有意な相関を示したものは、学習者の母語である日本語力であった。学習者の学習動機は、学習者の性格要因と有意な相関を示した。さらに、大学入学時は、学生の専門に関わらず英語学習に対する動機づけは、統計的に有意な差が存在しなかった。このことは、大学入試という英語学習の目的が達成され、学生達にとって英語学習における次の目標設定ができていないことを意味する。その為、専門分野が異なるにも

関わらず、学習動機に有意な差が見られなかったと考えられる。これらの結果を基に、学習者に対して長期的なインタビュー調査を行った。その結果を Dörnyei (2001)の Process-Oriented Model に従い分析したところ、大学入学時にいったん完結していた英語学習動機づけのサイクルが、新たなサイクルに突入しているにも関わらず、適切に動き出していないことが明らかとなった。特に大学1, 2年次の段階では、Process-Oriented Model の Choice Motivation の段階でつまづいていることが見えてきた。

本研究課題を通して、英語学習において学習者の母語である日本語力の重要性が示されたと同時に、高校から大学に入学してくる学生達に対して、Process-Oriented Model に基づいた適切なサポートを行う必要があることが示された。日本の大学で英語を学ぶ大学生の場合、Process-Oriented Model の最初の段階である Choice Motivation の段階において次の段階に移行するために必要な目標設定がうまく行われていないことが明らかとなった。本研究課題において、具体的かつ明確な学習目標を設定することの重要性が示され、そのような目標設定の為には、学生達にとって「明確に想起されたイメージ」や「リアルな体験」が必要となることが示唆された。大学において学生に英語学習を継続的に行わせるような英語カリキュラムを開発するには、大学における英語学習の初期段階でいかに目標設定を行うことができるかであるかが重要となってくる。その為には、広い視野で大学の英語カリキュラムを捉え、英語の教員だけで英語のカリキュラムを展開していくのではなく、専門課程の教員と連携を取ることで、カリキュラムを展開していく必要があることが明らかとなった。本研究課題では、学習者の英語学習活動に影響を与える要因については明らかになったが、授業内・授業外において具体的にどのように学生(学習者)にアプローチすると英語学習活動の促進に友好であるかについては結論が出なかった。今後の研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 長 加奈子 (2009) 「大学生の英語学習動機づけモデルの構築」、『北九州市立大学基盤教育センター紀要』, 第3号, pp. 1-19, 査読無.
- ② 長 加奈子 (2008) 「クローズテストの採点手法に関する一考察」、『Annual Review of English Learning and Teaching』, 第13号, pp. 33-43, 査読有.

- ③ 長 加奈子 (2008) 「Cloze Test の難易度に影響を与える要因について」, 『福岡女学院大学短期大学部紀要』, 第 44 号, pp. 1-17, 査読無.
- ④ 長 加奈子 (2007) 「第二言語習得と学習動機づけについて」, 『福岡女学院大学教育フォーラム』, 第 9 号, pp. 17-25, 査読無.

[学会発表] (計 2 件)

- ① 長 加奈子 (2008) 「自律を促す学習支援」, 平成 20 年度日本リメディアル教育学会九州部会パネルディスカッションパネリスト, 西南学院大学, 2008 年 12 月 20 日.
- ② 長 加奈子 (2008) 「英語学習活動に影響を与える心理的要因に関する一考察」, 九州英語教育学会第 37 回福岡研究大会, 九州産業大学, 2008 年 11 月 23 日.

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

○取得状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

長 加奈子 (CHO KANAKO)

北九州市立大学・基盤教育センター・准教授

研究者番号 : 70369833

(2)研究分担者

なし

研究者番号 :

(3)連携研究者
なし

研究者番号 :